

郭璞『爾雅注』の方法 — 『詩經』の引用を中心にして—

關 清 孝

目次

はじめに

一、郭璞『爾雅注』と『詩經』との関係について

二、樊光注と孫炎注が引用する『詩經』の特色

三、郭璞注が『詩經』を引用する方法

おわりに

はじめに

筆者は以前、郭璞『爾雅注』の引用文献について考察した⁽¹⁾。そこで、郭璞は當時の『爾雅』の注釋とは異なる新たな局面を作り上げ、そのことによって郭璞の注釋は高い評價を得ることができた、と結論付けた。新たな局面とは、經書以外の書物も多く引用していることである。ただし、經書を輕んじ他の書物を重視したというのではなく、經書を解釋するのに有用であることを前提として、さらに他の書物にも應用できるようにした、ということである。そこで本稿で

は、郭璞『爾雅注』が舊來の方法から引き継いだ面、つまり經書の引用に對する考察を行う。ことに、經書、特に『詩經』との關わりの中で考えてみたい。それは次のような理由による。

『爾雅』は以前より、經書の中でもとりわけ『詩經』との關係で語られてきた。つまり、『爾雅』は『詩經』を解釋するための書物である、という認識である。『爾雅』に對する研究は、この認識を出發點として多く行われた。たとえば、『四庫提要』は「使爾雅成書在毛公之前、顧得爲異哉、則其書在毛亨以後」と、『爾雅』の成立は毛公以前、もしこれを疑問視するならば毛亨以後であろうとし、その成立において『毛傳』と關係があつたであろうことを示唆している。しかし、また一方では「釋詩者不及十之一、非專爲詩作」と、『爾雅』は『詩經』を解釋するためだけに作られた書物ではないと述べ、この後に具體例を擧げ論證している。

ほかに、『朱子語類』の「『爾雅』は傳や注から文を抜き出し作られたものであるのに、後人は『爾雅』によって傳や注の文を證明している」との批判や、顧頡剛の『毛詩詁訓傳』の訓詁は『爾雅』に基づいている⁽³⁾、などの指摘があげられる。これらは、『詩經』と『爾雅』との關係性を認めた上での前後關係を求める議論である。このような言説に對して内藤湖南は經書の訓詁解釋と『爾雅』の成立との前後關係を追及することは意味のないこと、と斷じている⁽⁴⁾。

このように、『爾雅』は『詩經』の訓詁と密接な關係にあるという文脈の中で語られることが多かった。なかんづく『爾雅』の中でも、とりわけ釋訓篇は特にその關わりが深いものとされている。釋訓篇は『詩經』に見られる重文疊字を解釋しているとされている。また中には「是刈是穫。穫、煮之也」というような『詩經』周南 葛覃の文を直接引用し、その後に解釋をくわえるものも多く存在しているからである。

この『爾雅』釋訓篇と『詩經』との關係については、先行研究が存在する。代表例として、加賀榮治「詩經毛傳の訓詁に關する考察——その一、爾雅釋訓篇をもととして——」⁽⁵⁾が擧げられる。

加賀氏は、『爾雅』釋訓篇の記述が、『詩經』中の疊字を解釋したものとした上で、次の三點を述べている。

①經書の訓詁を集めた『爾雅』の中でも、釋訓篇は『詩經』解釋のために作られたものであること

②毛傳は『詩經』を解釋する上で、『爾雅』の訓詁を數多く採り入れていること。

③『爾雅』の訓詁を無批判に用いるのではなく、毛傳は一定の見識を持って採り入れていること。

しかし、加賀氏の論考に問題がないわけではない。それは研究對象にズレが見られることである。「ズレ」は次のようなことである。第一・二章では、『爾雅』ならびに釋訓篇の内部構造と考察し、さらに『詩經』をどのように解釋しているかの検討がなされている。そして、先に挙げた①の結論を導き出す。しかし、第三・四・五章になると、毛傳は釋訓篇の訓詁をどのように取捨選擇をしているのか、という考察が行われる。その結果、②③の結論をうる。このように論考の前半と後半では、論の視點が一轉するのである。そのため、ややまとまりのない結論になってしまっている。このことについては、加賀氏みづから次のように記していることからもうかがえる。

昭和二十三年十一月「爾雅釋訓考」と題して東京文理科大学漢文學會總會に於て発表したものを補正したものである。補正はしたものゝ、もともと爾雅が主題であり、直接の對象となつたものであるために、いま讀み返してみても、意に滿たぬところが多いが、全面的に書き直す餘裕をもたぬので、このまゝ發表することゝした。

發表時「爾雅が主題」であつたものが、論文化した時に「毛詩詁訓傳が、どのような態度で方法によつて訓詁をなし、どのような方向に動いて行つたかということ、爾雅釋訓篇と對應して考え」ることへと主題が變化したことから、この「ズレ」は生じたものであろう。また同時にこの「ズレ」は、逆説的に『詩經』がいかに重要な典籍であるかということの證左となりうるであらう。

これら先行研究を通して言えることは、總じて『詩經』を讀む際にどのように『爾雅』を利用したのか、という視點

であった。つまり、あくまで『詩經』研究が目的なのである。そこで、本稿では、逆に『爾雅』研究史の上から、『詩經』や『詩經』の注釋をどのように利用したのか、という視點から考察する。具體的には、郭璞『爾雅注』が引用した『詩經』の文章を考察することによって、郭璞注の特色を探ることを目的とする。

一、郭璞『爾雅注』と『詩經』との關係について

本章では、はじめに他の文獻が『爾雅』という書物をどのように記述しているのかということから、『爾雅』と『詩經』との關係を確認する。そして、その後で『爾雅注』を作成した郭璞と『詩經』との關係を見て行く。

『爾雅』は古くは『詩經』だけではなく、廣く「六藝」や「五經」との關係で語られてきた。『西京雜記』には、餘嘗て以て楊子雲に問ふ。楊子雲曰く、「孔子門徒游夏の儔の記す所にして、以て六藝を解釋せんとする者なり」と。⁽⁶⁾

と、郭威という人物の問いに、揚雄が、『爾雅』は「六藝」を解釋するために作成された書物であると答える文が見られる。また『論衡』是應篇には、「爾雅之書、五經之訓故」とあり、鄭玄「駁五經異義」では、「爾雅は以て六藝の旨を釋する所なり」⁽⁷⁾とする。

「六藝」や「五經」のための書から限定化し、『爾雅』と『詩經』とが關わり深いことを指摘したのは、『文心雕龍』から始まる。『文心雕龍』練字篇には、次のような文が見られる。

夫れ爾雅なる者は、孔徒の纂する所にして、詩書の襟帶なり。⁽⁸⁾

『爾雅』は、孔子の弟子たちが作ったものであり、『詩經』や『書經』を理解する上で、衣服の襟や帶のように重要な書物である、としている。つまり、『爾雅』を『詩經』や『書經』を解釋するための書物としているのである。また、同

じく『文心雕龍』の宗經篇には、次のようにある。

『書』は實に言を記すも、而れども詁訓茫昧なり。『爾雅』に通ずれば、則ち文意曉然たり。…中略…『詩』は志を言ふを主とし、詁訓『書』に同じ。⁹⁾

宗經篇では、なぜ『爾雅』が『詩』『書』にとって重要であるのかが、練字篇よりも具體的に説明されている。『書經』は帝王や功臣の言葉を記したものであるが、文字の読みや文章の意味はわかりづらい。ただし『爾雅』に通曉すれば、文意は明らかになる。『詩經』は人が志を述べることが主であり、これも『書經』の場合と同じように、『爾雅』に通曉すれば詩意が明らかになる、としているのである。内容を理解するためには『爾雅』に基づかなければならないと、『詩經』を解釋するうえで『爾雅』がいかに重要であるかを述べている。

時代は下り歐陽脩『毛詩本義』になると、さらに踏み込んだ表現が見られる。

『爾雅』は聖人の書に非ずんば、失無きこと能はず。其の文理を考ふれば、乃ち是れ秦漢の間、詩を學ぶ者、博士の解詁を纂集す。¹⁰⁾

『爾雅』という書物は多くの缺失があるため、『爾雅』は聖人の書ではないとした後で、『爾雅』の文理の面から、秦漢時代に『詩經』を學ぶ者が、博士家の詁訓解釋を集めたものである、としている。これは『爾雅』の成立目的そのものが『詩經』の解釋に關係深いとしているのである。このように『爾雅』というのは、經書の中でも『詩經』を解釋するための書物と位置づけられていたことが確認できよう。

それでは、郭璞と『詩經』とはどのような接点があるのだろうか。『晉書』郭璞傳の記述から郭璞の著作が確認できる。郭璞傳には次のようにある。

璞前後の筮驗六十餘事を撰し、名づけて『洞林』と爲す。又京・費諸家の要最を抄して、更に『新林』十篇・『卜

韻』一篇を撰す。『爾雅』に注釋し、別に『音義』・『圖譜』を爲る。又『三蒼』・『方言』・『穆天子傳』・『山海經』及び『楚辭』、「子虛」・「上林の賦」に注すること數十萬言、皆世に傳はる。作る所の詩賦誄頌亦た數萬言。

郭璞の本傳で述べられている郭璞の學術行爲は、『洞林』や『新林』・『卜韻』等の『易』や卜筮に関わる書を著したと。『爾雅』の注や『音義』・『圖譜』を著したこと。また、その他も『三蒼』・『方言』・『穆天子傳』・『山海經』・『楚辭』・『子虛』・『上林賦』に注をつけたこと。そして、多くの「詩」「賦」「誄」「頌」などの文を残したことである。ここからは『詩經』との接點は見られない。

しかし、郭璞撰とされる『詩經』に関して著述がある。『隋書』經籍志（經籍一詩）には次の一書が記されている。

毛詩拾遺 一卷 郭璞撰

この『毛詩拾遺』は、すでに亡佚しており、『玉函山房輯佚書』に七條が收められるのみである。また、『通志』に見られるものの、『經典釋文』序録や『唐書』藝文志には見られない。そのため早くに滅びたと考えられよう。

連鎮標『郭璞研究』⁽¹⁾は、段熙仲「浪漫主義詩人與語言學者郭璞」（『南京師院學報』一九六二年第三期）が『毛詩拾遺』逸文中の一條が、毛傳や鄭箋の解釋と異なっていることから「可能还有更多的對《毛詩》的拾遺匡誤。（さらに多くの『毛詩』の遺漏を補充し、誤りを正すことができる）」としていることを引用するもの、現状から「只是我們已很難尋覓到。（だが現在となつては探し求めることは大變難しい）」と結ぶ。

『毛詩拾遺』から離れると、わずかではあるが、郭璞『爾雅注』と『詩經』との關係に言及している論文も存在する。小林清市「陸疏の素描」⁽²⁾である。小林氏の論考は陸璣の撰とされる『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』の特色を論じたものであるが、その過程で次のように述べている。

陸疏と郭璞の生態に關する記述は草木の分野ではお互いに補完の關係にあり、…中略…内容的には大きなへだたり

はなく、…

このように『詩經』の注釋書の一つ『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』と郭璞『爾雅注』の内容が似ていることが指摘されている。『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』の作者を三國時代吳の陸璣とすれば、郭璞はこの書を『爾雅』解釋に大いに用いたことになる。

いささか斷片的ではあるが、『毛詩拾遺』ならびに『陸疏』との關係性の二つの面から、郭璞が『毛詩』の學を修めていた可能性が確認できる。そうであるならば、『爾雅』解釋に『詩經』を用いる際には、なにかしらの見識が存在したことが推測される。このことについては後ほど考察したい。

二、樊光注と孫炎注が引用する『詩經』の特色

本章では、郭璞注の特色を探る前に、郭璞注に先行する注の特色を探りたい。はじめに郭璞『爾雅注』以前に成立していた注釋を確認する。まず、郭璞注の成立前にはどのような注釋が存在していたのか見てみよう。

『經典釋文』序録には、「韃爲文學注二卷、劉歆注三卷、樊光注六卷、李巡注三卷、孫炎注三卷、郭璞注三卷」と、郭注も含め計六種が挙げられている。また『隋書』經籍志にも同様の注釋が確認できる。

このことから、郭璞以前には、韃爲文學・劉歆・樊光・李巡・孫炎の五種の注釋が成立していたということが推測できる。ただし、郭注を除く注釋は亡佚してしまっており、現在では輯佚書によって斷片的に知ることができる。

それでは、この五種の注はどのような書物を引用しているのだろうか。各注が引用している文献の種類と數を「表一」に示した。この表からは、樊光と孫炎の注の引用文献數が他の注に比べて壓倒的に多いこと、しかも雙方とも『詩經』

[表一]

| 孫炎 | 樊光 | 李巡 | 劉歆 | 健爲文學注 | |
|----|----|----|----|-------|-----|
| 5 | 12 | | | 1 | 詩經 |
| | 7 | | | | 春秋 |
| | 2 | | | | 周禮 |
| | 1 | | | | 易經 |
| 1 | 1 | | | | 論語 |
| 1 | | | | | 夏小正 |
| 2 | | 1 | | | 方言 |
| 1 | | | | | 本草 |

の割合が高いことも看取できる。そのため、以下ではこの二種の注に絞り、それぞれが『詩經』を引用する際の特徴を探っていききたい。まずは、樊光注から考えてみよう。

樊光注が引用する『詩經』については、清の臧庸によってすでに指摘がなされている。「爾雅注多魯詩」である。この中で、臧庸は『五經正義』や『爾雅疏』が引用する際に、某氏としている『爾雅』の解釋を樊光注とし、その佚文を採集し、樊光注が引用した『詩經』の全文章を『毛詩』の經文と對校している。そして全ての文で異同が見られることから、樊光は『詩經』を引用する際には『魯詩』を用いていたという結果を導き出している。この臧庸の説にしたがうのであれば、樊光は詩經を引用する時には、『毛詩』ではなく『魯詩』を用いていたということになる。

樊光注が引用する『詩經』は、『毛詩』ではなく『魯詩』に基づいているとするのは、臧庸ばかりではない。黄侃も次のように述べる。

樊氏の學は、古今を兼通し、故に常に『周禮』・『左氏傳』を引用して説を爲す。而して『詩』の「民之攸𠄎」・「攸攸我里」・「有蒲與茄」・「譬彼痲木」・「其農孔有」の諸條を引くこと、又毛・韓と同じからざれば、蓋し魯詩に本づく。

樊光の學問は、古文學・今文學ともに通じている。そのため古文經である『周禮』や春秋古文經を解釋した『左氏傳』を引用している。そして『詩經』の引用は『毛詩』・『韓詩』と異なっているので、今文經の『魯詩』に基づいているの

であろうと推測している。『禮』は古文經である『周禮』を引用し、『春秋』においては春秋古文經を解釋した『左氏傳』を用いている。ひるがえって『詩經』は古文經である『毛詩』と異なっていることから、三家詩の一つである『魯詩』を用いたことを裏付けている。つまり、黃侃は古文・今文學に兼通している樊光の學問的特徴から、『詩經』の引用を『魯詩』と推測しているのである。

この『魯詩』と『毛詩』について、武内義雄氏は『漢書』『後漢書』『兩儒林傳』によって學系をまとめた後で次のように述べている。

毛詩も荀卿から出ていると表記されているが、現に荀子の中に詩を説明している部分が毛詩義と一致しているものが多いから、此系譜も必ずしも無稽の談とは思えぬ、そうして魯詩が荀卿から出ていることは前述の通りであるから魯詩と毛詩とも深い關係があるに相違ない。又楚の元王はかつて申培に従って魯詩を學んでいるが、元王の子休公の曾孫劉向も又魯詩を傳え、劉向の子劉歆は毛詩を重んじているが、而も三家詩說中では魯詩が最も優れていることを認めている。この點から推しても魯詩と毛詩との關係の淺くないことが判る。想うに毛詩と左氏春秋とは後出の古文經傳によって魯詩義と穀梁義を改訂したものである。⁸⁸

このように『魯詩』と『毛詩』とが深い關係にあることを指摘している。たしかに『魯詩』と『毛詩』とは近い存在かもしれないが、いづれにしても先行研究に依據すれば、樊光は古文經の『毛詩』ではなく、今文經の『魯詩』を用いていたようである。

一方、孫炎注はどのような特徴が見られるのであろうか。『三國志』の魏書王肅傳の末に孫炎の傳が付記されており、そこには彼の學問體系が記されている。

時に樂安の孫叔然、學を鄭玄の門人に受け、東州の大儒と稱せらる。徵せられて祕書監と爲るも、就かず。肅「聖

證論』を集め以て玄を譏短するに、炎駁して之を釋す。又『周易』・『春秋例』・『毛詩』・『禮記』・『春秋』三傳・『國語』・『爾雅』の諸注を作り、又書を著すこと十餘篇。

王肅が鄭玄の經解に對して駁議を唱えたことは周知の通りであるが、その文脈の中で孫炎の傳は記されている。孫炎が鄭玄の門人に學んだこと、そして、王肅の鄭玄批判に對して、それを駁したことが述べられている。また、孫炎が『毛詩』に注を附していたことも注目したい。ただし、この孫炎の『毛詩注』は『隋書』經籍志をはじめとした歴代書目には見えず、早くに滅んでしまったものと思われる。

對して王肅の『詩經』關係の著述は、『隋書』經籍志に三種があげられている。

毛詩二十卷 〔王肅注。梁有毛詩二十卷鄭・王肅合注〕

毛詩義駁八卷 〔王肅撰〕

毛詩奏事一卷 〔王肅撰。有毛詩問難二卷王肅撰、亡〕

書名や王肅の本傳に記されている學問的立場からすれば、いづれもが反鄭箋の立場によって記されたであろうことがうかがえる。そうであれば、鄭玄の門人に學を受けた孫炎の『毛詩注』は王肅の説を駁するものであったことは想像に難くない。

孫炎注が鄭玄の學問に基づいていることは、孫炎注の佚文からも確認できる。

〔經文〕 𦉰、𦉰。其紹𦉰。

〔郭璞注〕 俗呼𦉰瓜爲𦉰。紹者、瓜蔓緒、亦著子、但小如𦉰。

〔孫炎注〕 詩云「縣縣瓜𦉰」。𦉰、小瓜、如𦉰。其本子小。先歲之瓜曰𦉰。

孫炎注が引く「縣縣瓜𦉰」は『毛詩』大雅、縣の「縣縣瓜𦉰、民之初生、自土沮漆」の一句である。そこに附された鄭

玄の説は次のようにある。

箋云、瓜之本實繼先歲之瓜、必小、狀似瓠、故謂之𧄸。

このように孫炎注は鄭玄の解釋に酷似しているのである。そうであるならば、反王肅とは言えないまでも、鄭玄の『詩經』學に基づき『爾雅』を解釋し注を作成したと考えるのが穩當であろう。

このように郭璞注以前において、『詩經』を多く引用していた樊光注・孫炎注、兩注におけるそれぞれの特色が確認出來た。それは、極言するならば、それぞれの時代の學問的對立を成立背景としているということであつた。樊光注は「古文經『毛詩』⇕今文經三家詩」という對立において、三家詩の一つ『魯詩』を選択し、そして「鄭玄の解釋⇕王肅の解釋」と對立に孫炎注は、鄭玄の解釋、つまり鄭箋を選択したのである。

三、郭璞注が『詩經』を引用する方法

ここまでは郭璞注に先行する樊光・孫炎の注の特色を探ってきた。次に郭璞注がいかなる特徴を有しているか検討しよう。本章では、郭璞注が引用する『詩經』を調査し、その後、前章で見た樊光注・孫炎注との比較を行う。

郭璞『爾雅注』の引用文献數については前掲の拙稿で述べた。その時に得られた『詩經』の總引用數は二百十三であつた。ただし、本稿では、この總數すべてを對象とするのではなく、條件を設けた。それは、郭璞注が直接引用している『詩經』の文章を檢討の對象とし、『詩經』に見えると指摘するに止めている箇所は對象から外す、ということである。次の釋詁篇の文を例にすると、郭璞注の中に『詩』は三箇所見られるが、「詩曰、有壬有林」と「又曰、文王蒸哉」を檢討の對象とし、「見詩書」の『詩』は調査外とするということである。それは郭璞注が意圖とする『詩經』の文が明らかであるからである。

〔經文〕林・烝・天・帝・皇・王・后・辟・公・侯、君也。

〔郭注〕詩曰「有壬有林」。又曰「文王烝哉」。其餘義皆通見詩書。

その結果得られた數、つまり、右のような郭璞注が引用している『詩經』の總數は百七十四條である。また、各篇における『詩經』の引用數は以下のとおりである。

〔上卷〕釋詁 77 釋言 37 釋訓 2 釋親 3

〔中卷〕釋宮 3 釋器 3 釋樂 4 釋天 11 釋地 0 釋丘 2 釋山 2 釋水 2

〔下卷〕釋草 8 釋木 4 釋蟲 2 釋魚 0 釋鳥 3 釋獸 4 釋畜 7

以下では、これに基づいて考察する。郭璞注が示した『詩經』の文章を、現在見られる『毛詩』の文章と比較をすると、いくつかの違いに氣づく。第一は次のようなものである。

〔經文〕初・哉・首・基・肇・祖・元・胎・俶・落・權・輿、始也。(釋詁篇)

〔郭注〕『詩』曰「令終有俶」。又曰「俶載南畝」。又曰「訪豫落止」。又曰「胡不承權輿」。

この注の「又曰、胡不承權輿」という文は『毛詩』秦風、權輿に存在するが、『毛詩』では次のようになっている。

〔經文〕于嗟乎不承權輿

〔毛傳〕承、繼也。權輿、始也。

郭注が引用した文は、「胡不承權輿」であるが、『毛詩』では「于嗟乎不承權輿」となっており、文に違いが見られるのである。このような例は、他にもいくつか見られる。假にこのような例を「『毛詩』と文が異なる例」としておく。

第二は、「毛傳の訓詁と異なる例」である。たとえば、次のような例がそれである。

【爾雅】「經文」儀・若・祥・淑・鮮・省・臧・嘉・令・類・緜・穀・攻・穀・介・徽、善也。(釋詁篇)

〔郭注〕詩曰、「我車既攻」。

【毛詩】「經文」我車既攻。(『毛詩』小雅、車攻)

〔毛傳〕攻、堅同齊也。

『爾雅』經文は「攻」が「善」である、としているのに對し、郭璞注が示した『毛詩』の文に附された毛傳では「攻」は「堅」としているのである。『爾雅』の訓詁と毛傳の訓詁が異なっているのは、このほかにも見られる。同様に鄭箋の訓詁と異なる例も見られる。

それが、第三の「鄭箋の訓詁と異なる例」である。これも、例を次にしめす。

【爾雅】「經文」拏・斂・屈・收・戢・蒐・裒・哀・鳩・樓、聚也。(釋詁篇)

〔郭注〕『詩』曰「屈此羣醜」。

【毛詩】「經文」屈此羣醜(『毛詩』魯頌、泮水)

〔毛傳〕屈、收。醜、衆也。

〔鄭箋〕屈、治。醜、惡也。

『爾雅』經文は「屈」が「聚」である、としている。郭璞注が示したのは、『毛詩』魯頌、泮水の「屈此羣醜」である。

この文に附された鄭箋を見てみると『爾雅』の訓詁と異なっている。

これらのことを、表にまとめると次の「表二」のようになる。第一の「『毛詩』と文が異なる例」は「×毛詩」に、第二の「毛傳の訓詁と異なる例」は「×毛傳」に、第三「鄭箋の訓詁と異なる例」は「×鄭箋」に、それぞれ数を示した。

[表二]

| ×鄭箋 | ×毛傳 | ×毛詩 | 引用數 | |
|-----|-----|-----|-----|----|
| 10 | 10 | 15 | 77 | 釋詁 |
| 3 | 5 | 8 | 37 | 釋言 |
| | 1 | | 2 | 釋訓 |
| | | 1 | 3 | 釋親 |
| 1 | 1 | 2 | 3 | 釋宮 |
| 1 | | 1 | 3 | 釋器 |
| 1 | | 1 | 4 | 釋樂 |
| 1 | 1 | 2 | 11 | 釋天 |
| | | | 0 | 釋地 |
| | | | 2 | 釋丘 |
| | | | 2 | 釋山 |
| | 1 | 2 | 2 | 釋水 |
| | | 2 | 8 | 釋草 |
| | 1 | 1 | 4 | 釋木 |
| | 1 | 1 | 2 | 釋蟲 |
| | | | 0 | 釋魚 |
| | | 1 | 3 | 釋鳥 |
| 2 | 1 | 1 | 4 | 釋獸 |
| | 3 | 2 | 7 | 釋畜 |
| 19 | 25 | 40 | 174 | 合計 |

このように現在の『毛詩』と文が異なる、もしくは毛傳や鄭箋と訓詁が異なる箇所が多くあることが確認できる。

『毛詩』經文と文字が異なることについて、前章で見た臧庸のように三家詩、もしくはその一つ『魯詩』を引用したと想像することも可能であろう。しかし、三家詩が滅びてしまった現在では確認をすることはできない。そのため、この結果を受けて短絡的に「引用は三家詩に基づいた」と結論づけるのは、早急であろうと思う。

郭璞注が詩經を引用する時には、必ずしも『毛詩』に基づいていないことを確認した。では、この結果は、どのようなことを意味しているのだろうか。郭璞注が確かに『毛詩』に基づいていることは、毛傳そのものを引用していることから想像できる。

〔經文〕 凡曲者爲韻。(釋訓篇)

〔郭璞注〕毛詩傳曰、「鬻、曲梁也」。凡以薄爲魚筍者、名爲鬻。

このような毛傳を引用する注は、『爾雅注』の中で六箇所見られる。また、鄭箋の引用も一箇所であるが見られる。

〔經文〕 臺、夫須。(釋草篇)

〔郭璞注〕鄭箋詩云「臺可以爲禦雨笠」。

このようなことから、郭璞注が引用した『詩經』は『毛詩』であることが考えられる。しかし、次のような例も存在する。

〔爾雅〕〔經文〕弘・廓・宏・溥・介・純・夏・幘・彪・墳・撮・丕・弈・洪・誕・戎・駿・假・京・碩・濯・訃・

宇・穹・壬・路・淫・甫・景・廢・壯・豕・簡・筍・販・啞・將・業・席、大也。

〔郭注〕詩曰、「廢爲殘賊」。

〔毛詩〕〔經文〕廢爲殘賊、莫知其尤。(小雅、四月)

〔毛傳〕廢、忼也

〔鄭箋〕尤、過也。言在位者貪殘、爲民之害、無自知其行之過者、言忼於惡。

ここまでは、先に確認した、『爾雅』の訓詁が、毛傳と鄭箋の訓詁と異なる形であるが、ここに附された『經典釋文』には次のようにある。

一本作廢大也。此是王肅義。

つまり、郭璞注が示した、『毛詩』小雅、四月の句を『爾雅』の「廢、大也」で解釋したのは、王肅であるとしているのである。郭璞注は王肅の『詩經』解釋に従い、「廢爲殘賊」の句を示したと考えられる。王肅の解釋以外にも、『魯詩』の引用も見られる。

〔經文〕臺・朕・賚・界・ト・陽、豫也。

〔郭注〕賚・ト・界、皆賜與也。與猶豫也、因通其名耳。魯詩曰「陽如之何」。今巴濮之人自呼阿陽。

經文の「陽」が「豫」であることを『魯詩』の引用によって證明している。前章で確認したように、臧庸は、樊光注が『魯詩』に基づいていることを指摘していた。郭璞注が『魯詩』と冠して引用するこの文は、樊光注に引かれたものを孫引きしたと考えることが可能であろう。しかし、樊光注が『魯詩』を引用した所と郭璞注を検討してみると、一致する箇所は確認できない。ただし、例外として次の文があげられる。ともに『詩經』を用いているのである。しかし、樊光注は文章を直接引用しているが、郭璞注は「見詩」と、具體的な文をあげず指摘にとどめている。

〔經文〕豫・寧・綏・康・柔・安也。(釋詁篇)

〔樊光注〕詩云「懷柔百神」。(『毛詩正義』卷十九之二)

〔郭璞注〕皆見詩・書。

また、直接引用しているわけではないが、『韓詩』も用いる箇所が存在する。釋訓篇には、次のような注が見られる。

〔經文〕怗怗・惕惕、愛也。

〔郭注〕詩云「心焉惕惕」。『韓詩』以爲悅人、故言愛也。怗怗未詳。

これらのことを考えると、郭璞『爾雅注』は、『毛詩』に基づきながらも『魯詩』や『韓詩』の文も利用し、さらには王肅の解釋も用いているのである。つまり、郭璞注以前の注では、對立する要素とされてきたものがすべて内包されているのである。郭璞注は『爾雅』經文を解釋し再構築をする際に、より適切な資料を選び利用したと考えるのが妥当であろう。

樊光と孫炎の注に對して郭璞注は、爾雅序で「樊孫を錯綜す」と樊光注と孫炎注を入り交え集めたと述べている。樊

光注に對しては、先程見たように、『詩經』の引用に關しては方法が異なっていた。しかし、孫炎注に關しては次のような例も見られ、その影響具合が推し量れる。

〔經文〕 閑謂之門。(釋宮篇)

〔孫炎注〕 詩云「祝祭于祊」。祊謂廟門也。(『毛詩正義』卷十三之二)⁽²⁾

〔郭璞注〕 詩曰「祝祭于祊」。

しかし、このことについては、すでに別稿における考察で明らかのように、郭璞注はただ樊光・孫炎注を無批判に集め利用したのではない。『詩經』の引用ということに關しては、次のようなものがある。

菱・諼、忘也。(釋訓篇)

〔孫炎注〕 詩云「焉得諼草」。(『毛詩正義』卷三之三)

〔郭璞注〕 義見伯兮・考槃詩。

孫炎注は經文の「諼が忘である」ことに對して、「焉得諼草」という『詩經』衛風、伯兮の文を引用し證明している。一方、郭璞注は「義見伯兮・考槃詩」とすることにより、孫炎注が示した引證もふまえ、新たに『詩經』衛風の考槃という資料も提示している。『詩經』衛風、考槃には、「永矢弗諼」とあり、鄭箋には「諼、忘也」とある。孫炎注が引證した、經文の「諼〓忘」は「伯兮」だけではなく、「考槃」にも材料があることを指し示しているのである。

郭璞注は「爾雅序」で「錯綜樊孫」というように、先行する注をふまえている。しかし、同時に舊注を補う、もしくは凌駕しようとする姿勢を看取できるであろう。では、どのような面で補ったのであろうか。それは、先程確認したことであろうと考えられる。すなわち、注釋對象となる古典の世界を再構築する際に、ある特定の論理に基づき行ったのではなく、より多くの論理を内包させて古典世界への復歸を果たしたと見るべきであろう。

従來の注が、外的存在である『詩經』を利用する際には、選擇を迫られていた『毛詩』⇓『魯詩』ないし三家詩』という對立、また、「鄭箋⇓王肅の解」といった『詩經』史上における爭點抜きには考えられなかった。しかし、郭璞注は、これらを包括し、注釋に内在化させているのである。このように、『詩經』を引用する際に見られる對立を越えた引用方法は、他の經書、さらには經書の枠組みを越えることになったと考えられよう。それは「爾雅序」にも明示されている。郭璞自身の手による「爾雅序」に次のような文が見られる。

誠に九流の津涉、六藝の鈐鍵、覽を學ぶ者の潭奥、翰を擲る者の華苑なり。

すなわち、六藝は當然のこと、學問の流派に固執せず、廣く學ぶ者や詩文を書こうとする者にとって必要不可欠の書物であると位置づけたのである。そうして、この認識に基づき經書ばかりではなく、多くの書物を引用するようになるのである。このような認識は『爾雅』の世界を擴大させ郭璞注は後世大きく評價されるにいたった。その結果、従來の對立項を内包させた郭璞『爾雅注』は、後世、郭璞注に従うのか否かの、二擇を迫る存在となるのである。

おわりに

ここまで、郭璞『爾雅注』における『詩經』の引用について、その方法の分析をとおして検討をおこない、筆者なりの結論をみちびきだした。しかし、このことについては、まだいくつかの問題が残されている。その中の主なものは次の三つであろう。

一つめは、郭璞『爾雅注』が後世の『詩經』研究にどのような影響を與えたかということである。郭璞注が成立した後には、孔穎達『毛詩正義』や朱熹『詩集傳』などが陸續と現れる。これらの書物は、『詩經』解釋に『爾雅』を利用してはいるが、その郭璞注はいかなる影響を與えているのか、言いかえれば、郭璞注受容の面から検討する必要がある

のではないか。

二つめは、一章で見たように『爾雅』に對する言説の歴史の中で、『詩經』もしくは『詩』『書』を解釋するための書と對象が限定されるのは、『文心雕龍』や歐陽脩『詩本義』であった。つまり郭璞注以降ということになる。これは郭璞注が示した「誠に九流の津涉、六藝の鈴鍵、覽を學ぶ者の潭奥、翰を摛る者の華苑」という「爾雅觀」とは明らかに異なる。これは『爾雅』の經典化と『詩經』學史とをあわせて考察する必要があると考える。

三つめは、『詩經』解釋上の問題に拘泥しすぎたことである。後漢末から六朝時代にかけての注釋を對象としたのであるから、その時代背景を勘案すれば、學際的學問の流れを抑えておくことが必要になるであろう。

さらには、この問題のほかにも多くの問題が存在するであろう。しかし、今回はこれらを指摘するにとどめ、稿を結びたい。

注

- (1) 拙稿「郭璞の注釋學——『爾雅注』の方法——」(『東方學』第百九輯、二〇〇五年)
- (2) 「爾雅是取傳注以作、後人却以爾雅證傳注」(『朱子語類』卷第一百三十八 雜類)
- (3) 「毛詩以訓詁取義爾雅」(『顧頡剛讀書筆記』卷七所收)
- (4) 「『爾雅』の新研究」(『支那學』第二卷第一號・二號、一九二一年。のち『内藤湖南全集』第七卷(筑摩書房、一九七〇年)に所收)に次のようにある。

提要に爾雅が經書以外の諸書の文を取つたといつてゐる所のものは、實は戰國から漢初の頃までの間に出來た種々の書籍に多く共通して載せられてゐるものであつて、其の何れが前であるとも後であるとも定め難いのであるが、それを偏に諸書が前で爾雅が後ろであると斷じたのは決して當を得たものと云ふことが出來ない。
- (5) 『函館人文學會 人文論究』一號(一九五〇年)所收

- (6) 「郭威、字文偉、茂陵人也。好讀書。以謂爾雅周公所制。而爾雅有張仲孝友。張仲宣王時人、非周公之制明矣。餘嘗以問楊子雲、楊子雲曰、孔子門徒游夏之儔所記、以解釋六藝者也。」(卷上)
- (7) 「爾雅所以釋六藝之旨。」(鄭玄『駁五經異義』)
- (8) 「夫爾雅者、孔徒之所纂、而詩書之襟帶也。」
- (9) 「書實記言、而詁訓茫昧。通乎爾雅、則文意曉然。故子夏歎書、昭昭若日月之明、離離如星辰之行、言昭灼也。詩主言志、詁訓同書。摛風裁興、藻辭譎喻、溫柔在誦。敢最附深衷矣。」
- (10) 「爾雅」非聖人之書、不能無失。考其文理、乃是秦漢之間、學詩者、纂集博士之解詁。」
- (11) 「璞撰前後筮驗六十餘事、名爲洞林。又抄京・費諸家要最、更撰新林十篇・卜韻一篇。注釋爾雅、別爲音義・圖譜。又注三蒼・方言・穆天子傳・山海經及楚辭、子虛・上林賦數十萬言、皆傳於世。所作詩賦誄頌亦數萬言。」(『晉書』卷七十二)
- (12) 二〇〇二年、上海三聯書局
- (13) 京都大學中國哲學史研究室『中國思想史研究』九、一九八六年。のちに『中國博物學の世界』(二〇〇三年、農文協)に所收。
- (14) 「爾雅三卷〔漢中散大夫樊光注。梁有漢劉歆・犍爲文學・中黃門李巡爾雅各三卷、亡〕。爾雅七卷〔孫炎注〕。爾雅五卷〔郭璞注〕。集注爾雅十卷〔梁黃門郎沈琰注〕。」(『隋書』經籍志 經籍一論語)
- (15) 他にも鄭玄の注があったとされる。「周禮」の「大宗伯」の疏の中に、「爾雅」の「北極謂之北辰」を引用し、その後に「鄭注云、天皇、北辰耀魄寶」と續いているのが根據となっている。餘蕭客『古經解詁』や胡元玉『雅學考』は、この文を鄭玄の「爾雅注」の文章としている。しかし、この箇所以外で鄭玄の注とみられる文章は確認できない。そのため、阮元は「校勘記」で、
- 此鄭注文耀鈎也。上引文耀鈎可證。因文承爾 雅之下、而或云「鄭有爾雅注」、誤讀此疏矣。とし、問題箇所は、「爾雅」に對する注釋の文章ではなく文耀鈎の注の文章をここでは引用したのであり、この文を根據として鄭玄に「爾雅」の注があったとするのは疏の文章を誤讀したものであるとし、斥けている。また、黃侃「爾雅畧說」や駱鴻凱「爾雅論略」も鄭玄の「爾雅注」はなかったものとしている。本稿もこれらの説に基づき、鄭玄の注は扱わない。
- (16) 『拜經日記』所收。なお、本稿は『皇清經解』所收本を用い、適宜『拜經堂叢書』所收本を參考にした。
- (17) 「爾雅略說」の論爾雅注家一に「樊氏之學、兼通古今、故常引《周禮》、《左氏傳》爲說、而《詩》：「民之攸卨」、「攸攸我里」、「有蒲與茄」、「譬彼痲木」、「其農孔有」諸條諸條、又與毛、韓不同、蓋本魯詩」とある。
- (18) 武内義雄『中國思想史』一九三六年、岩波書店

- (19) 「時樂安孫叔然、受學鄭玄之門人、稱東州大儒。徵爲祕書監、不就、肅集聖證論以譏短玄、炎駁而釋之、又作周易春秋例毛詩禮記春秋三傳國語爾雅諸注、又著書十餘篇。」(『三國志』卷十三、魏志十三、王肅傳)
- (20) 王肅の『詩經』學については、坂田新「王肅の詩經學」(『日加田誠博士考古稀記念 中國文學論集』一九七四年)を参照。
- (21) 『詩經』を調査するにあたっては、嘉慶二十年南昌學府開彫『重刊宋本十三經注疏附校勘記』所收の『毛詩正義』を用いた。
- (22) 『禮記正義』卷二十五は「孫炎云、謂廟門外。又引詩云祝祭於祊」に、『春秋左傳正義』卷二十三は「孫炎曰、詩云祝祭於祊、謂廟門也」に作る。
- (23) 「誠九流之津涉、六藝之鈐鍵、學覽者之潭奧、摛翰者之華苑也。」